



# 信州大学 経済学部同窓会報

第 5 号

発行者 信州大学経済学部同窓会  
同窓会事務局 〒390-8621  
長野県松本市旭3-1-1  
信州大学経済学部内  
TEL・FAX 0263-37-2309

平成19年12月22日発行

E-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp  
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第五号の紙面より

- 会長あいさつ 矢口晋司
- 特集 文部科学省・大学院GP採択「双方向ワークショップ型地域づくり社会人教育」
  - ・改革支援プログラムについて 金 早雪
  - ・地域社会イニシアティブ・コース——実績と展望 井上信宏

- 卒業生による講義—平成19年度 星野光秀
- 現代の産業・社会事情
- 同窓会理事会報告 矢口晋司
- 同窓会総会報告 矢口晋司
- 連載 ゼミ「今」 又坂ゼミ
  - 後輩達のゼミ紹介—

- 会員のたより
  - 平林昌廣 (1968年入学)
  - 霜田明宏 (1980年入学)
  - 清水匡文 (1981年入学)
  - 田中雄三 (1986年入学)
  - 上野朋彦 (1997年入学)
- 東京同窓会案内
- 編集後記

## 会長あいさつ

### 経済学部創立 三〇周年記念行事 に向けて

会長 矢口 晋司

信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野で広く活躍のこととお喜び申し上げます。

平素より、母校の発展ならびに同窓会活動に対し何かと関心を頂きありがとうございます。

さて、平成十九年度同窓会総会開催にあたりましては、公私ともに忙しい中、全国各地よりお集まり頂き、誠にありがとうございます。総会参加者はやや少ない状況ではありましたが、本総会に合わせ、小湊ゼミならびに平山ゼミが、ゼミOB会を開催すると連絡を頂きました。同窓会総会を毎年定期的で開催することとし、昨年より十一月三日を同窓会総会の日と定め、取り組んできたことが、ゼミOB会開催のきっかけとなったのではないかと自己満足している次第であります。これからもこの動きが他のゼミにも広がっていくことを期待したいと思います。

さて、この一年を振り返ってみますと、同窓会として特筆すべき

活動は展開できなかったわけですが、理事会の中で、今後の同窓会活動のあり方、学部との連携強化を中心課題として検討を進めてまいりました。少子化傾向が続き、大学生減少が叫ばれる今日、独立行政法人となった国立大学は、限られた予算の中で、特殊性を發揮しながら、優秀なる生徒を集めなくてはならない、という非常に困難な問題に直面しております。信州大学もその例にもれず、学生確保に向け、様々な試みに取り組んでおります。

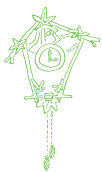
わが経済学部も大学全体の流れに乗りつつ、独自の取り組みを検討し、実践していく計画とことです。同窓会といたしましても、優秀なる後輩が数多く輩出されることを強く望むわけで、経済学部の取り組みに対し、出来る限りの協力体制を取っていききたいと考えております。今後示される具体的な取り組みに対し、学部との連携を深めつつ、理事会で検討する中で、協力体制を確立させて頂きたいと思っております。

今回の総会で、これまでの入会費に加え、新たに終身会費を徴収することを決定させて頂きました。年間約一三二万円の支出超過状況にある財政状況ならびに学部に対する今後の協力体制確立への準備という趣旨をご理解頂き、ご協力

をお願い申し上げます。

また、来年六月には経済学部が創立三十周年を迎えます。月日の流れの速さを感じつつ、その足跡の確かさが思い起こされ、感慨に絶えません。現在、学部において記念式典、記念誌刊行、地域政策研究センター（仮称）設立、記念募金など、記念行事の具体案の検討が進められているところですが、この記念行事に対しましても同窓会として何らかの協力体制をとっていきたく強く考えているところです。具体案が明らかとなった段階で、同窓会としてどう参画していくかを理事会で協議の上、決定させて頂きたいと思っております。

なお、会場等の都合もあり三十周年記念式典の開催日は、平成二十年十月十二日（日）に決定しております。従いまして、平成二十年度の同窓会総会は、この日に同時開催する事を理事会にて決定して頂きました。多くの同窓会員の皆様方の参加により、盛大な同窓会総会ならびに記念式典として頂くことをお願い申し上げます。三十周年という節目を迎え、ますます地域に根ざした信州大学経済学部となることを期待しつつ、その流れを同窓会員の皆様方にもご理解頂き、できる限りのご支援、ご協力をお願いし、会長あいさつとさせて頂きます。



特集

文部科学省・大学院G.P採択  
「双方向ワークショップ型  
地域づくり社会人教育」

平成十九年度採択  
支援プログラムについて

大学院地域社会イニシアティブ・  
コース g\_grad@shonshu-u.ac.jp  
金 早雪

経済学部の皆さん、お変わりありませんか？

今年九月七日、「信大大学院など／一二六件の採択」と題する、地方紙の小さな記事に気づかれたでしょうか？

G.Pと略称される、大学院教育改革支援プログラムに、わが経済・大学院の標記「双方向……」プログラムが、申請三五五件から採択された一二六件の一つに選ばれたというものです。

人文社会系では、申請六二件、採択二〇件と、ほぼ三倍という結構高い難関を突破した次第です。

「双方向……」プログラムの概要は、平成十五年度に創設された「地域社会イニシアティブ・コース」における、

（地域づくり）をテーマとする現場・実践重視の教育ほぼそのもの、いうなれば、「大学から社会へ、社会から大学へ」という経済学部の理念の、大学院教育での実践バージョンです。

快挙の決め手は、少子高齢化、格差社会、地域再生など、昨今の社会・経済状況が「追い風」となっただけではなく、修了生組織「信大地域フォーラム」の結成（平成十八年）、同フォーラムによる

（地域社会）修了生・社会人院生（大学院）の三者をつなぐ研究交流誌「フィールド」の創刊、同フォーラムのメンバーらによる「テーマ研究ワーク

ショップ」の開講（ともに平成十九年）など、ささやかでも着実な成果を社会に問いかけて、還元していることが、審査委員の目にとまったものです。

ご承知のように、目下、大学、とりわけ国立大学は、従来の金太郎飴的な「一律・平均主義」を脱して、大学なり学部ごとに明確な特色を持ち、何かに特化することが求められています（そうでないと、要は予算が来ない……）。そのため、どの大学・学部も特色作りに駆り立てられていると言っても過言ではありません。

皆さんの母校、わが経済学部は、その中で「授業研究ナード」で共創する「臨床の知」。大学院生、教員を専門に指導する教員、教育全般を指導する教員、の三者がチームを組み、授業の研究や課題解決に取り組み、大学院修了後、各専攻で主体的な役割を果たす人材を育てる狙い。

信濃毎日新聞  
二〇〇七年  
九月七日付

信大大学院など  
協会の採択発表  
文部科学省は六日、大学院の優れた取り組みに財政支援する「大学院教育改革支援プログラム」に国立、私立計六十一校、百三十六件を採択したと発表した。県内では信大（本部、松本市）が教育学と経済・社会政策科学の両研究科でそれぞれ一件ずつ採択された。

経済・社会政策科学研究科は「双方向ワークショップ型地域作り社会人教育」同研究科の「地域社会イニシアティブ・コース」は二〇〇三年度開設し、自治体職員やNPO法人職員ら社会人が学んでいる。プログラムは、院生と教員、同コース卒業生との三者が連携、自分の仕事についての客観的な見直しや課題の洗い出し、改善への政策的提言をすす

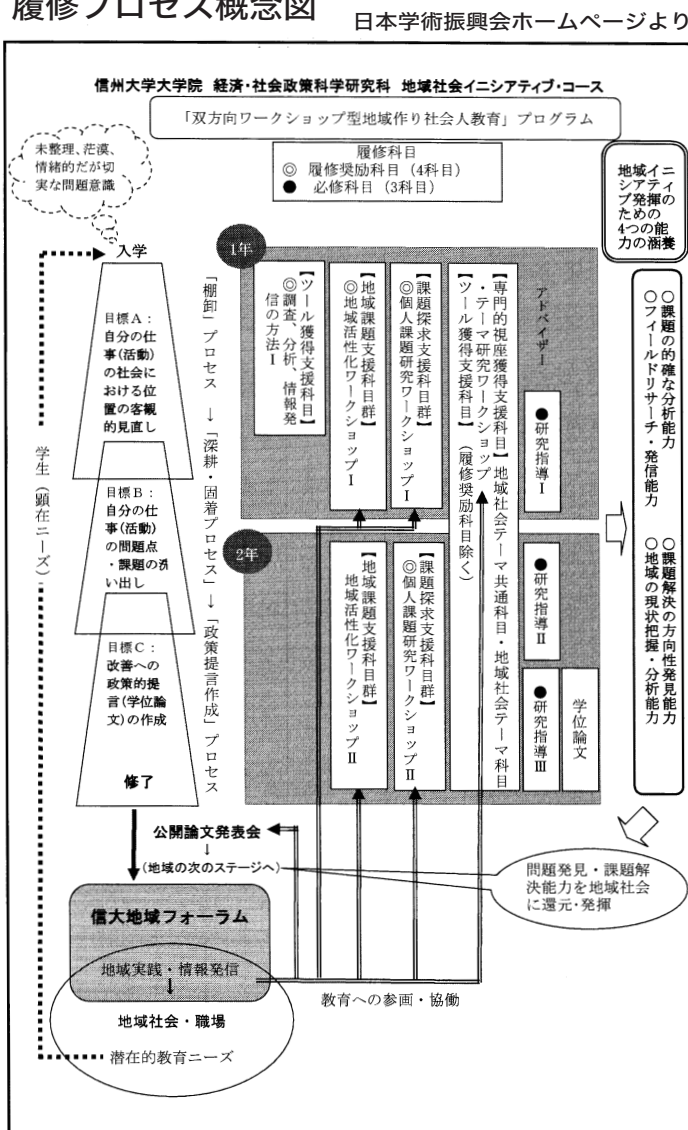
らする。この点、（社会）こそが学びとその還元の場であるというスタンスを一貫させてきたことは、いまさらにして先見の明であったと、教員一同、自負するところだ。そして、わが学部で育った皆さんは、きっと、それぞれの現場で、自ら課題を発見し、考察・分析し、そして提言・実践することに、自己実現という人生最大の楽しみを満喫されているものと信じています。

でももし、今少し、広いあるいは異なる視点から捉えてみたい、分析・考察のツールを磨きたい、提言・実践への壁をやぶりたいとお考えでしたら、是非、「地域社会イニシアティブ・コース」の門をたたいてみて下さい。異分野・異業種であれ同じように（地域づくり）に取り組む仲間との出会いが、きっと発想の転換や新たな元気を生み出すことではないでしょうか。

出すことでしよう。卒業生皆さんの御活躍を心から祈念すると同時に、母校を今後とも見守って下さいますよう、お願いする次第です。

現在、地域社会イニシアティブ・コースでは、さまざまな地域から、さまざまな職業経験を積まれた院生が集まり、共に研究活動を行っています。一般企業にお勤めの方ももちろん、市町村などの自治体の職員、NPOでの活動経験をお持ちの方、地域福祉の現場の最先端で働く専門職の方、現在は仕事をもち、フリーの立場から地域活動やボランティア活動に参加している方などが在籍しています。

履修プロセス概念図 日本学術振興会ホームページより



http://www.jpsps.go.jp/j-datagakuin/data/07\_sinsu/2021.pdf (日本学術振興会→大学院教育改革支援プログラム、からアクセス可)

地域社会イニシア  
ティブ・コース  
—実績と展望

信州大学経済学部が母体となる大学院（経済・社会政策科学研究科）の「地域社会イニシアティブ・コース」は、二〇〇三年春に、それまでの大学院をリニューアルして、地域社会を担

る点、（社会）こそが学びとその還元の場であるというスタンスを一貫させてきたことは、いまさらにして先見の明であったと、教員一同、自負するところだ。そして、わが学部で育った皆さんは、きっと、それぞれの現場で、自ら課題を発見し、考察・分析し、そして提言・実践することに、自己実現という人生最大の楽しみを満喫されているものと信じています。

でももし、今少し、広いあるいは異なる視点から捉えてみたい、分析・考察のツールを磨きたい、提言・実践への壁をやぶりたいとお考えでしたら、是非、「地域社会イニシアティブ・コース」の門をたたいてみて下さい。異分野・異業種であれ同じように（地域づくり）に取り組む仲間との出会いが、きっと発想の転換や新たな元気を生み出すことではないでしょうか。

出すことでしよう。卒業生皆さんの御活躍を心から祈念すると同時に、母校を今後とも見守って下さいますよう、お願いする次第です。

現在、地域社会イニシアティブ・コースでは、さまざまな地域から、さまざまな職業経験を積まれた院生が集まり、共に研究活動を行っています。一般企業にお勤めの方ももちろん、市町村などの自治体の職員、NPOでの活動経験をお持ちの方、地域福祉の現場の最先端で働く専門職の方、現在は仕事をもち、フリーの立場から地域活動やボランティア活動に参加している方などが在籍しています。

こうした院生に共通することは、全ての人が仕事や地域社会のさまざまな「現場（フィールド）」に軸足を置いて

問題発見・課題解決能力を地域社会に還元・発揮

教育への参画・協働

地域実践・情報発信

地域社会・職場

潜在的な教育ニーズ

公開論文発表会

（地域の次のステージへ）

信大地域フォーラム

日々の生活を送りながら、強い問題意識の中で、それぞれの「現場」が抱える問題の解決に向けて、自分で考え、自らアクションを起こすことを厭わな

「地域活性化」が声高に叫ばれていま。地域社会が、自らの知恵と力で、自らの地域と生活を守り、育て、豊かにすることが活性化した地域の姿です。

地域が抱えた具体的な問題を見つければ、それを分析し、地域の仲間とそれを共有しながら、共に解決のための方策（具体的な行動や政策）を考え、実行することが求められています。

このような社会人教育の場として大学院を位置づけるために、地域社会イニシアティブ・コースでは、いくつかの仕掛けを用意しました。その一つは、「平日夜間と土曜日の開講」です。

これまで、社会人大学院といっても、屋間に開講される講義が多く、仕事を休むか職場の長期派遣制度を活用でき、ごく限られた人しか進学することができませんでした。

二つめは、土曜日に開講される講義を「土曜日クラス」と位置づけ、高校までの教育と同じように、入学年次が同じ仲間が集団で受講するスタイルを導入したことです。

二つめは、土曜日に開講される講義を「土曜日クラス」と位置づけ、高校までの教育と同じように、入学年次が同じ仲間が集団で受講するスタイルを導入したことです。

究を深めるスタイルを大切にしながらも、そこで抱え込んでしまった問題や課題を、仲間とともに解決するためのしくみを作り出したのです。

「土曜日クラス」では、どのような教育が行われているのでしょうか。入学式を終えた新入院生が一番最初に受講するのが「土曜日クラス」です。

そこには、大学院教育に関わる五名の先生も同じ教室にいますから、一人の研究報告に対して、数多くのコメントやヒントを得ることが出来ます。

ほかに「土曜日クラス」では、社会調査の実習を行ない、地域の現場に出かけていく「フィールド旅行」が企画されてお

「現代の産業・社会事情」があります。これは、先輩（本学部卒業生）に学生時代の経験、職業経験、人生経験を語っ

「現代の産業・社会事情」があります。これは、先輩（本学部卒業生）に学生時代の経験、職業経験、人生経験を語っ

# 卒業生による講義—平成19年度 現代の産業・社会事情

教育企画委員会・交流系科目部会 星野 光秀

本学部の特色のある講義の一つに「現代の産業・社会事情」があります。

かけていく「フィールド旅行」が企画されてお、一人で黙々と研究するだけの大学院とは異なる「学びあう場」としての大学院が用意されています。

「土曜日クラス」のネットワークを大学院修了後も維持し、お互いの繋がりを保ちながら、研究や地域活動を発展

「信大地域フォーラム」が設立されました。そこでの主な活動は、お互いの研究や活動の交流、研究交流誌の発行

こうした社会人大学院「地域社会イニシアティブ・コース」の活動は、二〇〇七年度に「大学院教育改革支援プログラム(GP)」に採択され、教育活動

てもらった上で、後輩である学生にメッセージを送って頂くものです。先輩ということで、率直な御話が聞け

てもらった上で、後輩である学生にメッセージを送って頂くものです。先輩ということで、率直な御話が聞け

本年度は、十名の卒業生に講義して頂きました（受講者は一三〇名程度）。金融・保険、マスコミ、官庁、IT、ホテル、病院、製造業と業種的にもバラエティーに富むものでした。

「新聞記者を志望した理由、使命感及び仕事の内容」、「地方公務員の仕事とそのやりがい」、「IT産業の概況及び地方IT企業の挑戦（新規事業、海外展開）」

後輩へのメッセージですが、「信大で学ぶ利点を自から発見することが重要」、「自分の適性とやりたいこと及び使命感をうまくマッチさせることが重要」

「人を育てる目」を養って欲しい」等、学生を大いに啓発させるものでした。

学生とのつながりの重要性を知った、「先輩が非常に多くの分野で活躍していることに驚いた」、「先輩方の社会人としての大きさを感した」

最も印象に残ったことの一つに、最近、IHシボウラの社長に就任され

た西村隆志氏（一九七二年入学）の講義があります。先輩・後輩とはいっても当初感じられていました世代間ギャップが、講義が進むと急速に縮まり、最後は非常に打ち解けた雰囲気となり、一体感が醸成されていました。

平成19(2007)年度 担当講師一覧（敬称略）

氏名	入学年	勤務先
西村 隆志	1972	(株)IHIシボウラ
須藤 好一	1974	群馬銀行
前田 雄治	1978	豊田市役所
澤田 宏靖	1983	中日新聞社(株)
塚原 寛学	1984	(株)ジェイアール東海ホテルズ
城取 新	1986	キッセイコムテック(株)
芥川 久美子	1987	ヤマハ発動機(株)
中島 学	1988	(株)フジテレビジョン
渡部 学	1988	ゼネラル保険会社
金宰 栄	1995	(医)心泉会 上條記念病院

経済学部同窓会理事会報告

日時：平成19年7月14日(土) 午後3時より
場所：信州大学経済学部研究室

- 1 開会(樋口教授)
2 同窓会長挨拶(矢口会長)
3 経済学部長挨拶(渡邊学部長)
4 報告事項

(1)18年度・19年度同窓会活動報告について
・前理事会以降の活動内容について矢口会長より報告。
(2)信州大学東京同窓会について
・平成19年2月3日(土)午後3時より、アルカディア市ヶ谷で開催された東京同窓会について矢口会長より報告。
(3)経済学部学生情報取扱いに関する契約書について
・学部との間で締結した契約内容について事務局より報告。

◎会則に従い、矢口会長を議長に以下について協議。

- 5 協議事項
(1)同窓会費の値上げについて
・18年度会計報告を行い、年間約1,320千円の支出超過状況にある事を確認。
・他学部同窓会の会費徴収状況を調査検討するとともに、会費値上げの必要性について次理事会において再度協議する事を決定。
(2)同窓会総会について
・20年度同窓会総会の開催時期について協議。
・経済学部創立30周年記念行事との同時開催が望ましいとの観点から30周年記念行事の素案がまとまる

次理事会にて再度協議する事を決定。
・30周年記念行事へ同窓会として参画することに関しては、具体的な動きが見えた段階で再協議する事を再確認。

- (3)同窓会支部設立について
・東京支部設立に向け、検討委員会を立ち上げる案について、方向性を了承。
◎議長退任
6 閉会(矢口会長)
◎午後4時10分に閉会となる。(会長)

日時：平成19年11月3日(土) 午後1時より

場所：信州大学経済学部研究会室

- 1 開会(樋口教授)
2 同窓会長挨拶(矢口会長)
3 経済学部長挨拶(渡邊学部長)
4 報告事項

(1)19年度同窓会活動報告について
・前理事会以降の活動内容について矢口会長より報告。

(2)信州大学同窓会連合会への拠出金について
・信州大学同窓会連合会の運営費として7万円を拠出した事について矢口会長より報告。
◎会則に従い、矢口会長を議長に以下について協議。

- 5 協議事項
(1)同窓会費の値上げについて
・他学部同窓会の会費徴収状況を事

経済学部同窓会総会報告

日時：平成19年11月3日(土) 午後3時より
場所：信州大学経済学部(新棟六階) 会議室

- 1 開会(大槻副会長)
2 会長挨拶(矢口会長)
3 名誉会長挨拶(渡邊経済学部長)
4 議長選出 3 K西澤清さんを選出
5 書記ならびに議事録署名人の任命
書記に6 K清水匡文さん、議事録署名人に3 K手塚伸さん、9 K田丸徹郎さんを任命

(1)事業報告および会計報告の承認について
矢口会長より原案を説明。
伊東監事より会計監査報告。

平成18年度会計報告

Table with financial data: 【収入の部】前年度繰越金 13,720,328, 会費及び入会予約金 2,230,000, 利息収入 35, 収入計 15,950,363. 【支出の部】理事会関係経費 203,660, 経済学部活動支援 1,000,315, etc. 【次年度繰越金】 ¥12,399,869

平成18年度会計監査の結果、適正であると認めます。
平成19年7月14日
監事 伊東一雄 監事 川田智弘

質疑応答は特に無く、全員の拍手により原案承認される。
(2)予算および事業計画について
本議案に関連し、同窓会費の値上げに伴う会則改定の議案追加を上げ、承認される。
矢口会長より、原案を説明。
これまでの入会費(1万円)に加え、終身会費(1万円)を徴収したい旨提案。
それに伴う会則の改定内容
①第32条 「会費」↓「入会金ならびに終身会費」
②第33条 第1項 「会費」↓「入会金ならびに終身会費」
③第34条 第1項 「入会予約金」↓「入会金ならびに終身会費」



- 「入会予約金ならびに終身会費予約金」
- ④第34条 第2項 「入会予約金」↓「入会予約金ならびに終身会費予約金」
- 「会費」↓「入会金ならびに終身会費」
- ⑤第35条 「会費等」↓「入会金ならびに終身会費等」
- ⑥第37条 「会費」↓「入会金ならびに終身会費」
- ・質疑応答は特に無く、全員の拍手により原案承認される。
- (3) 役員の改選について
- ・本来、昨年の総会において役員改選の議案提案を行うべきところ、

連載

# ゼミ「今」

—後輩達のゼミ紹介—

## 又坂ゼミ

下里 真人

こんにちは。又坂ゼミ長の下里と申します。学生によるゼミ紹介ということで、この度は私達のゼミを紹介させて頂くことになりました。よろしくお願ひ致します。

又坂ゼミは又坂常先生指導の下、二年生九名、三年生六名、編入生の四年生が二名の計十七名の学生によって



構成されている、行政法の専門ゼミです。ゼミでは言うまでもなく行政法を中心に勉強していますが、現在は演習問題形式を採用しています。毎週、行政法に関する数題の演習問題が先生から出題され、ゼミ生は各自それに対する回答と理由をレジュメ形式で用意し

- 失念していた旨、矢口会長より謝罪。来年の総会まで現役員体制の継続を提案。
- ・質疑応答は特に無く、全員の拍手により承認される。
- (4) その他
- ・経済学部創立30周年記念行事について、学部より説明。
- ・同窓会としても記念行事に参画していく事ならびに同窓会員より広く意見を求めている事を確認。
- 7 議長退任
- 8 閉会(栗沢副会長)
- ◎午後4時10分に閉会となる。(会長)

ゼミに臨みます。ゼミではそれについて発表や議論をし、最後に先生からの解説が加えられます。そして次のゼミまでに法律答案形式で再提出という形を採っています。重要なのは、こうやって解説を受け理解した上で、もう一度同じ問題に取り組むことです。それは自らの理解度の確認になると同時に、やがては実力が向上し新たな問題にチャレンジできるようなことに繋がります。

また行政法の勉強と平行して毎年その時々時事問題を取り扱っておりま。時事問題というのは、まずその時々々の社会問題の中からゼミとして一つテーマを絞ります。そして、自分達で学習から結論に至る計画まで進め、関係する団体にお願ひをし、夏季休業を利用してヒアリング調査を実施させて頂いています。その後、まとめということで各人の答えを出し、最終的にゼミ全体としての結論を導きます。本年度は、一昨年度民営化されました旧道路公団を含む道路行政と郵政民営化をテーマに掲げて、先生のご苦労もあり、夏季休業中二泊三日で計四団体のヒアリングに成功しました。また、昨年度は原子力発電所問題をテーマに掲げ、同じく二泊三日で計五団体のヒアリングに成功しました。やはり実際それに携わっている人の生の声というものを聞くと、専ら自分達で調べ勉強を進めていくよりも、理解の具合が全然違ってくると思います。これからの進路を見出す上でも非常に良い刺激になります。

一方、又坂ゼミでは夏季休業を利用して福祉施設へのボランティア実習も行っています。はつきり言って私達は素人ですし、正直な所、「お手伝いする方」と言うより、「お世話になる」と言う方が適当かもしれません。それでも障害者の人たちと触れ合うことは常にはありませんし、自分の今までの誤った認識を改める良い機会ともなりまし

# 会員のたより

## 信州からの手紙

幹事 平林 昌廣 (1968年入学)

Aくん、こんにちは。その後、元気で活躍のことと思います。

さて、師走も間近い休日、小春日和に誘われ、県の森公園の散策にでかけました。思誠寮跡の大ケヤキもすっかり葉を落とし、雪化粧した美ヶ原や常念岳に囲まれ、静かな冬の気配漂う午後の公園でした。

今ではきれいに整えられ、「わが青春ここにありき」と記された旧制松高碑が建つこの公園一帯は、かつて、文学部から改組した旧人文学部が一九七〇年代初頭に旭町キャンパスに移転するまでの数年間、「県の森キャンパス」として、経済学部の前身「人文学部経済学科」のやんちゃな学生たちを見守ってくれた場所でもあります。そのようなわけで、ちょうどその時期、

た。一週間という短い期間ですが福祉施設での貴重な体験は、自分を人として一歩大人にし、その後の生活にも十分に活かされていると思います。またボランティアなどは本気でやろうと思わない限り、時間に余裕のある学生の内くらいしかできないことですから、そういった意味でも、このボランティア実習は、私達が学生生活を有意義に送るための一助となっていると思えます。

春休みに入つてすぐの二月には任意参加のスキー合宿も行っています。昨年度は白樺湖周辺のスキー場へ行き、先生もゼミ生も一時勉強から離れて、

爽やかな白銀の中リフレッシュすることができた二日間でした。何事もけじめが大事で、勉強するときは勉強する、遊ぶときは遊ぶといったメリハリをつけることによって、より一層の勉強効率の上昇に繋がるものと思います。ゼミではこういったことも大切にしています。

昨年度は又坂ゼミ同窓会があり、総勢八十名以上が出席され、その中に現役生も参加させて頂きました。今までに二〇〇人以上の卒業生を出している又坂ゼミは、来年度、先生の生誕六〇周年を迎え、ますます躍進していきま

この地で青春時代を送ったわれわれにとつては、悲喜こもごも、汗臭さや泥臭さ漂う幾つかの「ドラマ」がよみがえる場所でもあります。

Aくん、そのような訳で、この便りでは、当時のやんちゃ坊主の由無し事を書き綴ります。

あの「どくとるマンボウ青春記」が刊行された一九六八年(昭和四三年)、人文学部経済学科に入学したわれわれは、旭町キャンパスでの一年間の教養部生活の後、専門学科で学ぶべく、ヒマラヤ杉に囲まれた古風な松本高等学校跡の「県の森キャンパス」に移ったのでしたが、そこでは、三田誠広「僕って何」の世界さながら、全国的な大学改革の嵐とも連動して、大学と社会のあり方をめぐる激論が戦わされていました。

Aくん、その渦中に少し遅れて飛び込んだわれわれは、学部改組の嵐のなかで、学生なりに右往左往しながら、社会科学入門。議論と読書、そして恩

師の先生方に教えを乞うた字び舎は、今の県の森公園の南東隅の経済学科棟と講義棟。玉田ゼミの末席を汚し、経済原論から政策論、さらには両大戦間期を中心とした現代資本主義論まで、研究生生活の2年間も含めて、お互い言葉に尽くせない学恩を受けましたね。今も凛とした先生の、ほとんど一点の無駄もない講義が思い出されます。

そして、一学年六〇名という、こじんまりとした「社会科学塾」のような雰囲気の中で、早世されてしまった恩師玉田美治先生を通じて、またいくつかの講義や談論を通じて、深い学識と社会科学への強い情熱をお持ちの、当時の経済学科の若き先生方にも、親しく鍛えていただきました。特に、玉田先生ご夫妻からは、学問上のことにとどまらず人としての生き方に関するまでお世話になるばかりでした。その、文字通り「冷徹な頭脳と暖かい心情」を実践された先生のお姿は、その後、小生が終生かけて追いつめるべき理想の教師像ともなっています。

やんちゃ坊主どもの集団は、時にはキャンパスを抜け出し、ある時は、はじめに神田古本屋街へ文献漁りに出かけ、ある時は、台風や集中豪雨の中をかくぐくつて、スプリングの利いた軽自動車ですりルある全国行脚に出かけはたまた、ある時は、北アルプスの山小屋でトイレ掃除のアルバイトに異様に燃えたりと、大忙し。キャンパスを飛び出しているさまざまな邂逅や体験は、思いがけないところで思いがけない形で自分を支えるネットワークを形成している、それぞれの「人生の思いがけない宝物」(「セレニディピティ」となっている)でした。

さて、A君、お互いに世間からは団塊世代と呼ばれ、卒業後それぞれの道を無我夢中で歩んで、気がつけば本卦還りも間近。この間、小生が身を置いている信州の高校教育界も、若い高校

生たちも、戦後社会の枠組み総体の揺れに連動して、大きく変容してきています。

でも、「学校は日々ドラマ」。これまでも、学校現場や教育行政の場で、日々の生活に疲れ、苦しみながらも、優しく、賢く、逞しく、そして丁寧に生きている子供たち・家族・地域にたくさん出会っていました。世の中、捨てたものでもありません。

そんな中、教育の世界で痛感する課題のひとつは、家庭、地域、学校等々様々な場面で希薄化しつつある「絆」(人間関係)の再構築。ここ信州でも、高校や大学・地域などとの連携を深め、「開かれたキャンパス作り」の中で、子どもたちから奪ってしまった「自然・労働(手伝い)・仲間」を取り戻し、想像力や創造力逞しい若者たちを育て上げる工夫が求められています。

他方で、これらの課題の解決に向けて、広い視点からの理論的分析に基づき、新しい世紀の新しい時代に即応したいくつもの取り組みが、母校経済学部をはじめとしてあちこちで始まっています。高大連携も含めて、母校のとりくみのさらなるご発展を祈念するゆえんです。

**渡邊先生への御礼**

幹事 霜田 明宏  
(1980年入学)

渡邊先生(学部長)には、大変お世話になりました。霜田で御座います。不肖の教え子、霜田で御座います。先生は私を覚えていらつしやいますでしょうか？

この度、心ならずも信州大学同窓会幹事を仰せつかり、何分にも不慣れな寄稿をさせて頂き、何卒お許し頂きたくお願い申し上げます。

さて、この機会に誠に勝手ながら、私の学生時代から現在に至るまでを振り返らせて頂く所存です。お聞き苦しい点、多々ございますがどうかご一笑にお伏せ下さい。

私は、一九八〇年に一浪を経て人文学部に入學させて頂きました。しかし、何らの目的意識、勉強意欲もなく学部選択をしてしまった私は、二年に進級するに際し自分の人生計画が如何に欠如しているかを痛感いたしました。即ち、「就職先の選択肢の狭さ」に気が付いたのです。

そして教養学部(当時)から学部への進級面接の際、私は、経済学部への転部を申請し、確か再試験を経て、晴れて経済学部経済学科という、いわゆる就職に潰しの利く学部への転部に成功したのでした。更に、三年進級時のゼミ選択に際し法学系を希望し、花の渡邊・漬しの高梨と言われた信大双壁ゼミの渡邊ゼミ潜入という幸運を得ることができました。

経済学部のホームページ「学部長挨拶」に現在、渡邊先生が紹介されている通り、経済学部の就職率は当時から群を抜いておりました。おそらく、当時の有名私立大学以上の就職率であったと実感致しております。

現在、私は長野県内の製造会社の生産管理部門に所属致しております。転向癖があるのか当初入社した会社から転職しています(現会社からは御大学に元常務取締役が国際交流センターに教授としてお世話になっております。大変、腰の低い方ですが飲むとその独特の信念の深さが判ります。面白い、芋焼酎のような方です)。

さて、嘗ては、日本国内に生産拠点があり、この拠点の生産ライン、生産効率を最大化する事が生産管理部門の使命でした。

ところが、現在は労働集約型の製造業務は国外(東南アジア圏)に移管され、生産管理業務を含め、工場運営の業務全体が海外生産拠点に移管されております。従いまして、当然のことですが嘗ての生産管理業務は、今、日本国内に存在しないことになりました(一部国内生産は除きます)。

私は現在、日本国内に勤務いたしておりますが、当然のことながら国内に於ける生産管理業務の業務形態は変化し、また日本国内に於いて行うべき業務が特定されつつあります。

◆輸出入に関する日本国内の国税、外為対応を行わなければならない。

※この業務は企業としては付随業務であるが、法人としてはmusic業務。例えば、移転価格供与対応(海外現法に不当に利益を蓄えて日本国税を逃れる)、下請法対応(資本金三億円未満の下請け業者に対する保護法)。

これらの変化の中で関連法規を無視したものは一つとして存在はしません。昨今の「ミートホープ」「白い恋人」「赤福」「吉兆」等等、製造会社に関する消費者無視とも思える背任行為は目に余るものがあります。企業として、利益の創出は当然の行為ではありませんが、消費者利益の確保が最優先であることは言うまでもありません。

これらの悪例を挙げるまでもなく、現在の日本国内に於ける管理業務の大半は、「法令遵守」に集約されます。先ずは、法令遵守(含む安全性)ができていないことが企業存続の条件になっています(個人的には下請法の存在が国内の製造業を弱体化させていると思えます)。

この意味で、信州大学経済学部システム法学科の存在意義は非常に大きいものであると思えます。このような企業活動の根底を支える法的知識を有する人材の輩出、創造を常に念頭に置かれているからです。

◆「逆には請求書」の流れは、生産現法↓日本本社↓販売現法として日本本社が、生産現法より製品を買い上げ、その価格に利益を付加して販売現法に売り渡しを行うこと(=DROP SHIP) ※最も効率的な方法は、製造現法で注文書を発行元・日本として発行することが良いが、税務上許されていない

◆全世界の生産・在庫・物流のセンター業務機能となる ※この活動が企業として一番重い。付随して関連法規の遵守が求められる。

◆輸出に関する日本国内の国税、外為対応を行わなければならない。 ※この業務は企業としては付随業務であるが、法人としてはmusic業務。例えば、移転価格供与対応(海外現法に不当に利益を蓄えて日本国税を逃れる)、下請法対応(資本金三億円未満の下請け業者に対する保護法)。

が御座います。現在、法学部を超越し、法科大学院が創設されたこと、正に私の想像以上の結果です。関係諸兄に感謝申し上げます(ちなみに、この私の卒論はBでございました)。

来年は本学部創設三十周年です。今後も、本学本学部の益々のご繁栄をご祈念申し上げます。

### 近況雑記

理事 清水 匡文  
(1981年入学)

四年前、仕事で松本にいた際、理事を仰せつかったのですが、これといった協力ができず申し訳なく思っています。

今回は、寄稿の機会をいただきましたので、まずは近況をお伝えしたいと思います。

近頃は通販やPCサポートなど、電話での問い合わせや商品の注文をされる方も多いと思いますが、私は現在、東京にある保険会社で電話を受ける側のコールセンター業務を行っています。

商品への問い合わせや、時には苦情などもいただきますが、言葉だけで意思疎通を図ることの難しさを痛感する毎日です。

各種案内を送付した後は入電が増えますが、特に年末の控除証明書送付後は、一年で一番忙しい時期となります。この会報がお手元に届くころは、ひと段落していることと思います。

コールセンター内には、入電状況を示す電光掲示板が設置されており、常に対応状況がわかるようになっていました。

卒業後、保険会社という転勤の多い仕事に就きましたので、社会人になって二十二年の間に、長野から北海道までの東日本を二往復(十カ所)しました。お客様との対面の仕事は長く、このコールセンター業務はようやく二年

経過したところです。

表情や身振り手振りが伝えられないだけに、普通の話し方では、うっかりすると冷たい印象を与えてしまうことも多く、それ自体が苦情になってしまいうこともあり。丁寧言葉を選んで話しているつもりでも、話すテンポの違いや、ちよつとした抑揚のありなしで、対応に心がこもっていないと思われてしまい、話しかかみ合わなくなってしまうこともあります。

また、耳に集中してのコミュニケーションなので、余計な雑音が入らないようにすることにも神経質になります。独特の緊張感がある仕事だと思いつつ、それだけに満足していただけた時には、他の業務を担当していただけた時には、他の業務を担っていた時にはなかつた満足感や安堵感を感じながら、一人一人のお客様と接しています。

そういった緊張感と併せ、集中力も持続しなければいけないので、時間の経過が非常に短く感じられます。そうした生活を送る中で、最近特に気をつけていることは、とにかく健康でいることです。明瞭で聞き取りやすく話すためには風邪などひいてはられませんし、依頼された内容を正確に聞き取るための集中力を維持することは、健康でないとできません。

今年の社内健康診断では、前触れもなく胸囲測定が始まりました。辛うじて胸囲のメタボ基準は2cm下回ったのですが、保健士から「体重を減らして血圧を下げなさい」と指導を受ける始末でした。たしか大学時代には27インチ位のジーンズがはけたのですが……。酒好きな上司の誘いも多く、土日だけのウォーキングをしているだけでは、多分来年は見事なメタボ体型になっていく気がします。

四年前に理事を拝命したころは、開智学校あたりからお城を眺め徒歩通勤をしていましたので、松本にずっといれば、健康診断の結果も良好だったのでは?と思います。

また、健康的な澄んだ空気もさることながら、落ち着いた佇まいの松本城山公園からアルプス公園にかけての遊歩道から見える、安曇野や北アルプスの眺望、個人的には女鳥羽川沿いのおきな堂(一年中新歓コンパの臭いが残っていた「こまくさ寮」の外観も……)などは、二十二年前も四年前も変わりありませんでした。しかし、市内の再開発でかつての姿が思い出せないほど変貌した伊勢町通りや、まつも市民芸術館、昔風な趣を残しながら整備された縄手通り、お城周辺を走る人力のペロタクシーなどは、久しぶりに松本に戻った私には驚きでした。卒業後松本を離れている方には、ご自分の目で確かめていただくことをお勧めします。

とりとめの話になってしまいましたが、松本のことを思い出すことも元気の源であり、時々は出かけてリフレッシュしたいと思っています。

### 思えば卒業して十八年

幹事 田中 雄三  
(1986年入学)

大学時代、指導教官である若杉先生が、ふとこんなことを言われたことを思い出す。「男も四十を過ぎると、やたら同窓会というものをしたくなるものだね。今までは、忙しさを理由に疎遠になっていたけど、不思議とこのころは集まりがいいのだよ。僕もそうだけだ」……さて、私も今年四十一になり、かつての先生の歳に近づいてきた。卒業して十八年、信州大学は私にとって遠い存在となって久しいが、今までサボっていた同窓会活動への懺悔も込めて、同窓会誌の紙面を僅かでも埋めることのお役に立てればと思う。

浪人が決まり、取り敢えず何もすることのない春休みにワイド周遊券を片手に十日間程も宛も無く信州を旅した。思えば初めての一人旅であった。司馬遼太郎の「竜馬がいく」八巻をリュックに詰め、松本、木曽福島、諏訪、上田、戸隠、軽井沢と巡り、改めていいところだと思った。旅の中で、生まれ育ったところから少し距離をおき、自然に抱かれてのんびり四年間過ごすのも良いなあと受験を決めた。

合格した後、蟻ヶ崎の賄い下宿の世話になり大学生活が始まった。大家さんの人柄は申し分なかったが、三食ともに卵料理がでてきたことには閉口した。努力はしたが、そんな人間は卵を食べられない。一生分の卵を食べ終え、二年目から自炊を始めた。ここでは、入居してから出るまでずっとおでんだった。下宿が女鳥羽川沿いの本学裏であったので、通学途中の留学生や学部の悪友たちがよく立ち寄り、おでんに手を加えてくれたので日本の各地方やアジアの味付けがぶつかり合う濃厚な味であったような記憶がある。

同じ下宿であった二階に住むニラン君とは私が留学生チューターになってからは三日に一回は酒を飲んでいただけだ。彼は当時から鋭いビジネス感覚をもっており、留学生の中でもリーダーとして活躍していた。一方でよくお酒を嗜み、彼を「に乱君」と呼んでいたこともあったかな。因みに、彼の作るタイ料理は格別旨かった。今は、タイに戻り、不動産業界で活躍している。

若杉ゼミのゼミ長である藤岡君とは今でも連絡を取り合っている仲である。飄々とし、あの頃からおっさんの風貌で、仇名は「とっつあん」であった。ゼミ生からも留学生のチューターと仲間からもやるときはやるという信頼された人間であり、今もそうである。彼は当時頑なにバイトを拒んでいた。理由は、「将来どうせ忙しい仕事につくから、この四年間は思いつきりのんびりする」とのことだ。読書と居眠りと温泉の生活を実践し、卒業後は予言どおり放送局に就職し、大変に忙しい毎日となっている。

張君も忘れてはならない。新宿で飲みすぎて介抱してもらったり、浅間温泉のバイトを世話してもらったりで、どちらが留学生なのか最後まで疑問だった。今は、社内で日本人の文章の添削をしていると聞く。

理学部の武村君にも非常に影響を受けた。持ち前の行動力で縦横無尽に駆け巡り、よく明治維新の志士たちの話で盛り上がった。岡田松岡にあった、彼の下宿で掛け軸を背後に杯をする姿を初めて見た時、そこは間違いなく幕末であった。

紙面の都合で詳しく書ききれないが、信州大時代に出会った関谷君、武田君、多田君、高部君、小坂橋君、サウデイ君らの友人達には影響を受けた。それは、自分の常識が広がったということに他ならない。大都会での学生生活とは違い、みんなどこかのんびりしていて、会おうと思えば学内、市内のどこかで会えて、影響を受けたことは貴重な体験であった。中には、今年体調を崩した自分に忙しい中駆けつけてくれた友人もあり、本当に有難いと思った。つくづく信州大に通って良かったと思えた。

少し、学校の事にも触れよう。当時は、松本に教養部があり、八学部生全員が一年間履修することになっていた。ここでは、玉井先生の農学ゼミが最高であった。特に南小谷でスキの苗木を植えた経験は新鮮だった。川で冷やした五一ワインが美味しかった。植林場の下草狩りをサボって十七年になるが無事にあの苗木は育っているであろうか。

二年目に学部生になった。大谷先生が米誌フォーチュンのカバーストリーを毎回読むことを十年続ければセン

### 信州大学東京同窓会の開催について

文理学部の諸先輩方により毎年開催されている、信州大学東京同窓会が今年も下記により開催される運びとなりました。つきましては、東京近郊にお住まいの会員の皆様方でご都合がつかれます方の積極的なご参加をお願いいたします。

信州大学経済学部同窓会 会長 矢口晋司  
記

- 1 日時 平成20年2月2日(土)午後2時30分受付開始
- 2 場所 東京都 アルカディア市ヶ谷
- 3 内容
  - ①記念講演 駐日モンゴル大使  
レンツェド・ジグジット氏  
(信州大学繊維学部卒)
  - ②信州大学の近況と課題  
小宮山 淳 信州大学学長  
白井 汪芳 信州大学理事
- 4 懇親会 講演会等終了後、会費制(一万円)による懇親会があります。
- 5 その他 記念講演および懇親会ご出席の方は、同窓会事務局までメールまたは電話(火、木の10時~15時)でお知らせください。  
(メールアドレス、TELは一面参照のこと)

スのいいビジネスマンになれるといわれていたことは記憶している。しかし、肝心の実行は昨日までのところできていない。若杉ゼミの中ではC・J・マツケンナ著の「不確実性の経済学」の購読にて数学的手法の鮮やかさに感動した記憶がある。また、金先生の比較経済論や村上先生の国際貿易論も仕事面で役立つ。卒論は開発経済について書いた。

経済の実学という意味では、旅館のバイトは大変参考になった。ここでは、本当に営業のノウハウを学ばせてもらったと今でも思う。その旅館は、浅間温泉にあり、栄の湯旅館という。今でも営業はされている。

思えばあの四年間は、温泉の中や様々な書物や人々と触れ合いながら穏やかな時を過ごしていたまたとない期間であったと思う。その経験は、確実に

その後の人生に影響を及ぼしていたと今感じる。そして今、松本の縁を不思議に感じる。妻の親友が岡谷に住んでいたことや、娘が鈴木メソッドでバイオリンを習っていたのだが、その夏合宿が毎年松本で開催されるという。その合宿の指定旅館に栄の湯旅館があった。であれば、偶然にも親子二代でお世話になることになる。であれば、季節も良くなってきたことだし、来年の下見ということで久方ぶりに浅間温泉にも出かけようか。そういえば、縄手通りの近くにアミという喫茶店があったが、再開はしたであろうか。彗星クラブはまだあるのかな? シェアのママは元気かな? まるも懐かしいな。北京のたんめん、百老亭の中華丼は? いろいろ思い出してきた。第二の故郷の松本を離れて十八年、この先どこまで行くのやら。

### 社会人になって、中国の現状と考えること

幹事 上野 朋彦  
(1997年入学)

二〇〇一年春に卒業して、早いもので八年目もう終わろうとしています。学生の時は漠然とどんな仕事かというのか解らないまま就職しました。

私事で恐縮ですが、就職した会社での出来事の近況報告したいと思います。

私は地元長野県の精密部品製造企業に就職しました。部品製造工場の生産管理部門へ配属となり、初日から名古屋出張、一気に業務引継ぎ。仕事の内容は発注を受けた内容から生産計画の立案、必要な原料計算と手配、在庫数の管理、そして何より計画どおり納品できないことによる社内外の調整というものでした。連絡という作業を必死にこなし続ける、というのが現実でした。

毎月毎月同じ作業の繰り返し、「こんな事誰でもできる」生意気にもそう思いながら、自分の価値をどう付けて行くか? 「早く帰れる、楽に仕事ができる」ようになるにはどうしたら良いのか?なんてことを結構真剣に考えていました。

世の中は甘くなく、入社一年半ほどで、職場や業務に「慣れ」て来た頃、突然転勤命令が下り、中国工場建設・立上という、自分と無縁だと思っていた「仕事」に携わることとなりました。

人の採用から日本研修への送込みとフォロー、会社規則の作成、給与計算という会社の基幹部分と、製造現場でのオペレーションという実践的な部分まで、計二年間、文化や言葉の違う世界でゼロから会社を立ち上げる、何かから何を? なくてはならないのか? 解らないまま、後になってああすれば良かったと後悔も多く、若い時に貴重な経験をさせてもらったと思います。

学生時のバイトと違い、社会人って

なんて辛いのだろう、そう思っているのは私だけではないと思います。学生の時は時間が有っても、お金が無い。社会人はお金が有っても、時間が無い。仕事に慣れてくると、お金と時間が有っても、やりたい事を忘れる。いつたい何のために働くのか? 考えても答えは出て来ませんし、いつも楽しい仕事というわけにはいかないのですが、たまに楽しいからまあまあ続けられる、そんなところで折り合いをつけて行くものかと思えます。

中国の現状はニュース等で流れる通り、凄まじいスピードと副作用を伴いながら進んでいる様に思います。私が赴任した華東地区は最も発達している地域の一つで、上海市中心部は、日本の都市と大差無いと感じます。所得格差はとも想像できない大きさで、電動バイクや自転車移動手段として主流に用いられている中、超がつく高級車が平然と通り過ぎていきます。建設現場は24時間3交代、騒音も粉塵も関係なく、また地震の無い国のため作りは割と簡素に、あつという間に高いビルが次々と建てられていく状態です。

現地の人たちの衣服、携帯電話等の持ち物も、赴任した当初は明らかに日本との差がありましたが、現在ではすでに見分けが付きにくくなっています。

所得の上昇は発展スピードの早い沿海部で年間15~20%と凄まじい勢いで伸びており、購買力が強く、高い製品からよく売れるという状況です。液晶テレビをはじめとする家電製品、建設機械、自動車等の製品を作り出す各日系メーカーは、欧米系企業、韓国企業と激しい競争を繰り広げています。

最初自分や他の日本人同僚を含めた三、四名からスタートした現地の会社も四年目の現在ではすでに三五〇名を超える規模となり、更に急ピッチで拡大中です。

私の業務ですが、中国に最初赴任し

帰国後、岩手県の工場へ転勤、再度中国へ赴任を経て、現在営業部門のある東京と中国を行ったり来たりという状況です。

世界の工場といわれる中国ですが、基本的に人材は流動的で、離職率が高く、人員の10%が毎月入れ替わるのが当然の世界で、本当にモノづくりがこの国で成り立つのか? 疑問も残るので、やはりこれからも中国の低コスト製造能力と購買力の力強さは間違い無いうちにも思えます。

日本の製造業がほとんど中国等外国へ流出し、この先の日本に対する不安も有るのですが、はたして本当にそれほど不安な状況なのか? という疑問も有ります。いままでは良かっただけで、すでに日本の労務費は非常に高く、競争力は失いつつある現在が当たり前と考え、新しいモノを生み出して競争してゆく他ないのだろうと思います。

ゼロから生み出す、企画を作り出し成功する難しさと楽しさ、この楽しさが増える様になれるには? まだまだこの先どうなるのか解りませんが、その状況が楽しめることが出来たらいいと、これからの自分に起こることに期待して過ごしたいと思えます。

以上、とりとめもない内容ですが、近況報告です。

### 編集後記

今年も会報年二回発行をなんとか果たせた。玉稿をお寄せくださった皆様、に厚く御礼申し上げます。最近の大学は忙しい。グローバル化圧力への反応として、競争原理が大学にも導入され、そのための評価・点検や改革を強いられているからである。膨大な書類づくりや会議に忙殺されている。研究するひまがない!? 皆様よいお年を!

(事務局)